

ヨブ記から学ぶ神の牧会学

「ヨブ記」からの説教 No.7

【聖書箇所】 38章1節～42章17節



主要聖句: 38章2節

「知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くする者はだれか。」

ベレーシート

- ヨブ記からの説教もいよいよ最後を迎えました。38章において、主は長い沈黙を破るようにして突如として「あらしの中から」ヨブに直接語りかけ、かつ、問いかけます。その主の問いかけに、今朝耳を傾けたいと思います。
- そもそも、出口のない苦難に向き合っている人間にとって、襲ってくる問いは、「これらすべては何のためなのか」という問いです。また、「なぜ、ほかならぬ、この私が苦しまなければならないのか」という問いです。このような問いは、簡単に答えが得られるようなものではありません。ところが、苦難にあった者、そしてその者に同伴する者はなんとかして苦難の原因を探り出したり、あるいは、苦難の意味を見出そうとしたりしました。ヨブの三人の友人たちもそうでした。自分の潔白を訴え、理由なき苦難だと嘆くヨブに対して、彼らはなんとかヨブを慰めようとするのですが、それが反って、ヨブの心を傷つけてしまう結果となります。ヨブは16章2節でこう言います。「あなたたちは皆、慰める振りをして苦しめる。」(新共同訳)と。
- ヨブの三人の友人たちに代わって、エリフという人物が登場します。しかし彼もヨブの訴えが、神を冒瀆しているようにしか思えず、苦難には神の愛に基づくある教育的な意味があるのだとヨブを諭します。神はいろいろな方法で語っているにもかかわらず、人間の方がそのことに気づかない。そのために、神は人が滅びることがないように、あわれみとして何度も苦しみを与えることで気づかせようとしているのだと語りました。そして話は次第に、神の支配する世界には人間の知識では到底理解できないことが多くあるのだと語って、ヨブを説得しようとしたのです。
- 注目すべきことは、ヨブの三人の友人もそしてエリフにも共通していることは、ヨブの神に対する訴えが、神を冒瀆するようにはしか思えなかったということです。ですから、神を弁護するために彼らは、伝統的な先人の知恵によって、あるいは神の支配の大きさによって、ヨブを説得しようとしたのでした。
- ヨブの潔白さ、あるいは潔白さを訴えるヨブ自身を信じる者はだれひとりとしていませんでした。それは訴える検察官がいても、弁護してくれる者がひとりもない法廷に立たされているようなものです。もしいるとすれば神以外にはいないのですが、その神が全く沈黙しておられるのです。ヨブの心痛は如何ばかりか、想像を絶するものであったと言えます。しかし、主は突如、「あらしの中から」ヨブに答えられたのです。

1. 「あらしの中」での主の顕現 (第一回目)

- 聖書では「あらし」は神の顕現、あるいは尊厳と威光を表わします。しかし、その「あらしの中」で、神ご自

身がだれかに直接的に語りかけるというのは、ヨブに対してだけです(38:1/40:6)。「あらし」と訳された「セアーラー」(הַעֲרָלָה)は、他に「暴風、つむじ風、竜巻」と訳されています。「竜巻」は風速60~70m級の勢いで、家も車も人も一瞬にして吹き飛ばしてしまう恐ろしい風です。その中に人が立つことは不可能です。ですから、ここでの「あらしの中からヨブに答えられた」という表現は霊的な意味だと言えます。「あらし」は人間がコツコツと築いてきたものや経験や知識を一瞬にして吹き飛ばし、破壊してしまう力を持っています。人は大自然の力に襲われたときにはじめて自分の力の弱さを自覚するものです。その証拠に、「あらしの中から」語られた主のことばで、ヨブに今までにない大きな変化が訪れることとなります(40:3~5)。

(1) ヨブに対する主の命令のことば

●ヨブに対する主の冒頭のことばは、「**知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くする者はだれか。**」でした。このことばは、単に、ヨブだけでなく、ヨブのそばにいた三人の友人、そしてエリフに対して語られたことばでもあると考えます。しかし、ここでの主の顕現はヨブの訴えに対するものであることから、直接的には「**さあ、あなたは・・・**」と、ヨブに向けて語られたと言えます。38章だけに限定するならば、以下のように、3つの命令の動詞があります。



①「**さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。**」(3節a)

●原文では「腰に」という言葉はありません。「帯を締める」という「アーザル」(אַזַּל)は、本来「帯びる」ことを意味します。「腰に帯を締める」と言えばそれは戦いに出陣するため備えることを意味しますが、神の恩寵によって「力を帯びる」(強くされること)「喜びを着る」「衣をまとう」という意味でも使われます。ここでは「神の問いかけに対して自分自身を整えるように(prepare yourself, get ready)」という意味で使われています。「さあ、用意はいいか」というニュアンスです。

②「**わたしに示せ。**」(3節b)

●「示せ」と訳された原語は「知る」という意味の「ヤーダア」(יָדָע)のヒフィル(使役)態です。「ヤーダア」には「答える」という意味もあります。従って、主が尋ねることについて「答えてみよ」と命じられています。

③「**あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。**」(4節b)

「**そのすべてを知っているなら、告げてみよ。**」(18節b)

●「告げる」と訳された原語は「ナーガド」(נָגַד)のヒフィル(使役)態です。「知らせる、教える」という意味もあります。4節の「告げてみよ」との神の問いかけの内容は、具体的には38章5節以降の事柄に対してです。この神の問いかけには、ヨブの尺度を問題とし、すべてを自分中心に見ていることに対する痛烈な皮肉がこめられています。

(2) ヨブに対する神の問いかけ

●神の問いかけにはパターンがあります。一つは、「・・・したことがあるのか」「・・・することができるか」という問いかけで、文頭に「疑問辞」の「ハ」(ה)が連続して使われています。海の源、深い淵の奥底まで行ったことがあるか。死の門、死の陰の門を見たことがあるか。地の広さを見極めたことがあるか。天の星々を導くこ

とができるか。・・・などです。また「・・・するのはだれか」という問いかけでは、文頭に疑問代名詞の「ミー」(מי)が使われています。地の基とその大きさを定めたのはだれか。海の水に境を定めたのはだれか。・・・などです。いずれにしても、神の創造の業がヨブの思いを越えた神の絶大なる知恵によるものであることを想起させています。

●38章39節～39章30節に登場する動物たち—獅子、烏、野やぎ、雌鹿、野ろば、野牛、だちょう、馬、たか、わし—は、人間にとっては親しみ難い生き物であり、時には人間に危害を与え、脅威となる動物たちです。またそれらの動物の生態は、人間の目線から見ればとても不可解です。たとえば、39章13～18節に記されている「だちょう」の生態がそうです。だちょうは元気よく羽ばたくことはできても、不思議なことに少しも飛ぶことができません。また卵を産んでも産みっぱなしで、地上に放置し、土(砂)の上で自然の力で暖めて孵化させます。孵化する前に、人や獣が足で踏みつけて、つぶしてしまうかもしれないのです。子に対する親鳥の扱いも荒く(乱暴に扱い)、せっかく生んで育てたその労苦が無駄になってしまうことも気にしません。17節では「神がこれに知恵を忘れさせ、悟りをこれに授けなかったからだ」としていますが、走るとなると馬を見下すほど恐るべき威力を発揮するのです。これもまた神の創造の不思議さです。ちなみに、「だちょう」と訳された「レガーニーム」(רִגְמָיִם)はこの箇所にものみ使われていますが、同じくヨブ記の30章29節では、同じ「だちょう」と訳されてはいても、原語は「ヤアナー」(יָאנָא)が使われています。こちらの方が聖書では一般的なようです。

●すべては創造者である神につながっており、神なしには何一つ存在することができないのです。そこにこそ神の創造の不思議があります。そしてこれらのことは、人間中心にものごとを見ようとする立場に対して、自分を離れて物を見ることの必要性を教えているように思われます。

2. 「あらしの中」での主の顕現 (第二回目)

(1) 主へのヨブの応答

●ヨブ記40章6節には「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」とあります。これは再度(二度目)の顕現です。すでに第一回目の主の語りかけに対してヨブが答える場面があります。

【新改訳改訂第3版】

3 ヨブは【主】に答えて言った。

4 ああ、私はつまらない者です。あなたに何と口答えできましょう。私はただ手を口に当てるばかりです。

5 一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と、私はくり返しません。

●にもかかわらず、そのヨブに対して二度目の主の語りかけが記されています。それが40章6節～41章34節です。ところで、なぜ主は二度も「あらしの中から」ヨブに語りかける必要があったのでしょうか。第一回目の「主の語りかけ」に対するヨブの答えを、今度は新共同訳で見てみましょう。

【新共同訳】

3 ヨブは主に答えて言った。

4 わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。

5 ひと語りしましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません。

(2) ヨブに対する主の第二回目の問いかけの要点は何か

●ヨブは、主の語りかけによって自分が軽率であったことを認めたのですが、主が二度もヨブに語りかけたのには理由があったように思います。38～39章に見られる第一回目の主の「あらしの中から」の問いかけの要点は「知」です。「・・・を知っているか」という表現が繰り返されているのが特徴です。自然の営み、いろいろな動物、天体が登場していますが、その主眼点はそれらの不思議な営み、生態、そして運行などを知っているかというものでした。神の創造の世界には人間の知らないことが多くあることを主はヨブに問いかけたのです。

●ところが、40～41章に見られる第二回目の主の問いかけの要点は「力」です。それを聖書(新改訳)では「さばき」と訳していますが、原語では「ミシュツパート」(טַשְׁפֹּט)です。つまり、主の「統治力」「支配力」「制御力」を意味します。主は、二つの海獣〔①「かば」ベヘーモット, תַּחֲמֹנִים〕と②〔「レビヤタン」リヴヤータン, לִוְיָתָן〕を例にあげて、それらを捕獲することは決して容易ではないこと、ましてや、それらを思うように飼ったり支配したりすることが困難であることを語っています。人間のどんな武器をも軽くはねのけてしまうそれらに立ち向かうことはまさに狂気の沙汰であることを示しています。

●これらの例の意図は、二つの海獣を正しく治めることのできる力があるならば、その力を行使してみよ、と主はヨブに反問的に挑戦しているのです。つまり、それが不可能であるように、どんなに正義を訴えたとしても、現実の人間社会におけるさまざまな不義や不条理を制することは難しいことを暗に示しているように思います。

●人間的な視点から出発する問題(苦難や悪の問題)は、ヨブが三人の友人やエリフと対論して経験したように、真の解決を得ることは難しいこと。人間の正しさや力によっては、制することのできない領域、支配することも、自由にすることもできない領域があることを教えているように思います。神の登場は、常に、神の視点から問題を考えようとしないう限り、常に、地的現実の問題に引きずり回されてしまうということを悟らなければならないのだと思います。

3. ヨブの「見神」の経験が意味すること

(1) ヨブの「見神」の経験

●「あらしの中から」語りかけた神に対して、ヨブが答えて言った最後のことば(42:1～6)の冒頭は「ヤーダティー」(יָדַעְתִּי)で始まっています。つまり、「私は知りました」(新共同訳「私は悟りました」)という意味ですが、「何を知ったのか」「何を悟ったのか」、その内容は以下の二つです。

- ① あなたには、すべてができること。
- ② あなたは、どんな計画も成し遂げられること。

●主にはできないことは何もないということ。また、どんな計画も成し遂げられること。この二つを「知った」(「ヤーダア」יָדַע)のです。この「知った」とは、単に知識として知ったというよりは、神との直接的なかかわりを通して知ったということです。聖書では夫婦の愛の営みも「知る」ということばで表わされます。ここでも、神がヨブに直接現われて語りかけてくださったことによって、ヨブははじめて主を「知った」のです。そのことをヨブは5節で「私はあなたのうわさを耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。」と表現しています。ヨブは主の語りかけを聞いただけでしたが、彼は「あなたを見ました」と答えています。

●同じく見神の経験をした預言者にイザヤがいます。イザヤの場合、彼は幻を見たのです。といっても、実際の

目ではなく、心の目、あるいは霊的な目で見ただのです。ヨブの場合、直訳すると「私の目はあなたを見た」(「エーニー・ラーアットハー」עֵינַי רָאִתְךָ)となりますが、「目」(「アイン」עַיִן)は、ヘブル語ではその人自身を意味します。つまり、それはヨブが期待したような形ではありませんでしたが、主ご自身のヨブに対する啓示(語りかけ)によって、ヨブ自身が主の語られることを「理解した」ということを意味します。

●エバがサタンにだまされて罪を犯した際の行動を見ると、まず「木の実を見て、取って食べ、与えた」とあります(創世記3:6)。「見た」ことが罪の第一歩だとすれば、その逆である「神を見る」ことは救いにつながります。ちなみに、聖書は人の完全な救いの完成の表現を「神の御顔を仰ぎ見る」(黙示録22:4)としています。

●ヨブの見神の経験が預言者イザヤのそれと異なる点は、イザヤの見神の場合は、神を見たことによってイザヤ自身が死に値する者として恐れましたが、ヨブの見神の場合は、神の直接的な啓示を、彼が全存在をもって受けとめたことです。換言するならば、パウロが主と出会って経験した「目からウロコが落ちた」、そのような経験であったろうと推察します。このような神との出会いにヨブが与ったのは、ヨブが納得できるまで、どこまでも神を尋ね求め、神に訴えたからです。神に問いかけることを神は求めているのです。「訴えること」「言い分を立てること」を「リーヴ」נִיב(法廷用語)と言いますが、まさに「ヨブのリーヴ」が神に届いたと言えます。

●ヨブが経験した「見神」は、ヨブをして、創造者である神の絶対性と被造物である人間の卑小さを自覚させた。つまり、ヨブがずっと訴えていた自分の義を完全に崩壊させたのでした。その意味ではパウロの経験とよく似ています。

(2) 42章6節をどのように理解するか

●主の問いかけに対して、ヨブはそれを理解したことを6節で言い表しています。3章から始まった詩文による文体は42章6節のヨブのことばで終結します。ところが、このヨブの最後のことばはきわめて重要です。ここでも新改訳では訳が改訂されていますので要注意です。つまり、6節の最後のことばである「悔い改めます」が「悔いしています」に改訂されているのです。訳が異なると当然解釈も異なってくるため、少々、この節にこだわってみたいと思います。6節を諸訳で見てください。

- 【新改訳改訂第3版】 **それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔いしています。**
- 【口語訳】 それでわたしはみずから恨み、／ちり灰の中で悔います。
- 【新共同訳】 それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し／自分を退け、悔い改めます。
- 【中澤洽樹訳】 そこでわたしは(傲りを)捨て、塵灰の身に甘んじます。
(中澤氏の旧訳では「自ら憐れみます。」としており、その訳も可能だとしています。)
- 【バルバ口訳】 そのために私は自分の愚かさにあきれ、ちりと灰の上で悔やみます。

●「さげすむ」「恨む」「退ける」「捨てる」「あきれ」と訳された原語は「マーアス」(מָאָס)で、拒絶、拒否、否定を意味する語彙です。リビングバイブルは「つくづく自分に嫌気がさしました」と訳していますが、妙訳です。ここでヨブが否定しているのは、おそらく、ヨブがこれまで主張してきた「自分の義」と考えられます。

●6節にあるもうひとつ重要な語彙は「ナーハム」(נָחַם)で、本来、「悲しむ」「憐れむ」「悔いる」「悔やむ」を意味します。新共同訳や関根訳は「悔い改めます」と訳しています。この「ナーハム」が聖書で最初に使われて

いる箇所は創世記5章29節ですが、そこでは「ナーハム」の強意形ピエル態で「慰める」という意味で使われています。基本形の意味で最初に使われているのは、同じく創世記の6章6節です。そこには「主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」とあります(新共同訳は「後悔した」と訳しています)。「後悔する、悔やむ」ということと「悔い改める」という表現は必ずしも同じではないように思います。ここをどう理解するかで、ヨブ記全体のイメージにも影響してくるようには思います。ヨブ記42章6節での「ナーハム」は、これまでヨブを支えてきた自分の義がポッキリと折れてしまったわけですから、悲しみが無いはずはありません。しかし、その悲しみも「神のみこころに添った悲しみ」であるならば次があります。つまりそれは、「いのちをもたらず悲しみ」です。

- 「いのちをもたらず悲しみ」とは、神の光で自らを照らした真実な姿を、自己中心で傲慢な自分を認めて悲しむことです。それを認めることはとてもつらいことであり、悲しみを伴うことなのですが、これが「神のみこころに添った悲しみ」なのです(Ⅱコリント7:10参照)。ヨブは「自分をさげすみ」ながらも、それで終わることなく、神を中心とした人生の方向へと転換することができた人だと言えます。それゆえ、主は以前(1~2章)と変わることなく、彼を「わたしのしもべヨブ」と四度も(42:7, 8)呼んでいるのです。聖書の世界において「しもべ」は最高の称号だということを心に留めておきましょう。

- 以上のような意味において、「悲しむ」「悔いる」の意味をもった「ナーハム」(נָחַם)が、ヨブの**主体的決断としての「悔い改め」**をもたらしたと理解することができます。

4. ヨブ記のエピローグ (回復されたヨブの祝福)

- 42章7節から文体が詩文から散文に変わります。多くの学者が、散文で書かれたテキストと詩文で書かれたテキストは本来別のものであることを指摘しています。もともと散文で書かれたテキストがあり、そこに詩文で書かれたテキスト(人間の普遍的な苦しみの問題をテーマとしたもの)が挿入されたとしています。

- ヨブが実在した人物かどうかという点については、実在した人物で間違いありません(エゼキエル14:14, 20)。ヨブの年齢について記されている唯一の箇所としてヨブ記42章16節があります。それによれば、ヨブの苦難の経験を経境として、その前半の人生と後半の人生があり、後半の人生が140年で、長寿を全うして死んだとあります。単純に計算すれば、ヨブは280年の生涯であったと言えます。

- ノアの洪水の前に主は人の齢を120年にしようと言われましたが、ノアは大洪水の後、350年生きて950歳まで生きています。そのあと人の齢は徐々に減り始め、アブラハムの父テラは205歳、そしてアブラハムは175歳、イスラエルの指導者モーセは120歳となります。そこからヨブが生きた年齢を考えると、セムからアブラハムに至るまでの時代に生きた人ということになります。しかもその時代の聖書の舞台は、まだカナン之地ではありません。「ウツ」と呼ばれる地にヨブは住んでいたのです。多くの謎に満ちたヨブ記ですが、最後に、ヨブが元の繁栄を回復された42章7節以降に目を留めてみたいと思います。

(1) なぜ、神はヨブの友人たちを叱責されたのか

【新改訳改訂第3版】ヨブ記42章7~8節

7 さて、【主】がこれらのことばをヨブに語られて後、【主】はテマン人エリファズに仰せられた。「わたし

の怒りはあなたとあなたのふたりの友に向かって燃える。それは、あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。

- 8 今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、あなたがたのために全焼のいけにえをささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わたしは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない。あなたがたはわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったが。」

①叱責の理由(a) ・ 「わたしについて真実を語らなかった」

●主がヨブの3人の友人の代表格であるエリファズに対して叱責しています。その叱責には主の怒りが含まれています。その理由は、「あなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったから」だと、二度も繰り返されているからです。「わたしについて真実を語らず」とはどういう意味でしょうか。

「真実」という部分を、口語訳は「正しいこと」と訳し、新共同訳は「正しく」と訳しています。原語は「堅く立てられた」「据えられた」という意味の「クーン」(קוּן)のニファル態(受動態)の分詞が使われています。

●この箇所は友人たちが神について「堅く立てられた」ことを正しく語らなかったことに対する叱責がなされていると考えられます。つまり、彼らが伝統的な教理、経験的な知恵の枠の中でしか神のミシュパート(支配・統治)を理解せず、それをヨブの苦難の理由として、しかも神に代わってヨブを説得しようとしたことです。つまり、彼らはヨブが何かの罪を犯したがゆえに、このような苦しみを受けているのだと主張し、それをヨブに認めさせようとしたのです。この友人たちの誤解にヨブはどれほど傷つけられたか計り知れません。同時に、彼らの態度は神の御名を侮辱し、恥辱を与えたとも言えます。

●神に対して謙遜であること、神の真理に対しては常にオープンマインドであることよりも、伝統主義的な理解の型紙を神の真実と思い込み、その枠の中でヨブを非難し、苦しみを増し加えていたことに対する神の叱責のことば、それが7節なのです。

②叱責の理由(b) ・ 「わたしのしもべヨブのようではなかった」

●「わたしのしもべヨブのようではなかった」とはどういう意味でしょう。自分の潔白を主張し、不条理な苦痛に対してどこまでも答えを神に尋ね求めたヨブのようではなかったということです。つまり、「なぜ」「どうして」と納得がいくまで神に問いかけることのない姿勢がなかったことに対する叱責です。

●詩篇の中にも、「ゆえもなく」ふりかかった苦しみに対して、詩篇の作者たちは神に問いかけています。神のしもべとは、単に「イエスマン」のような者のことではなく、納得いかないことに対してどこまでも神に問いかける存在でもあります。神のしもべと言われたモーセにしても然り、ダビデにしても然りです。そして、神のしもべとしての究極的存在であるイエシュアも、十字架の上で「わが神。わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれましたが、その叫びは神への疑いではなく、問いかけなのです。その問いかけは必ずしも不信仰ではなく、強い信頼によって裏付けられた問いかけだったのです。

●ヨブの神への訴え「リーヴ」(לִיב)は、「もし神がおられるなら、なぜこのようなことが起こるのか。なぜ、このことを神は許されるのか」といったレベルとは異なります。「とても信じられない。こんな神を許せない。」と神を疑い、不信を突き付ける時に私たちは罪を犯すのです。疑問があったとしても、神が良い(トーヴ、טוֹב)方であることを信じ貫くことができるかどうか。神のしもべであるイエシュアは十字架上で最終的に「父よ。わ

が霊を御手にゆだねます。」と言って息を引き取られました。

(2) ヨブのとりなしによる赦しと祝福の回復

●三人の友人がヨブに犯した罪は、ヨブのとりなしの祈りによって赦されます。そのことを神が保証します。そしてそれは同時に、ヨブが元の祝福を取り戻すことと密接に関連づけられています。「雄牛七頭、雄羊七頭」という数も律法に定められていない数であることから、この点からもこの話はモーセの時代よりも前の時代だと推測されます。彼らが主の命じられたようにすると、「主はヨブの祈りを受け入れられた」(9節)とあります。直訳すると「主はヨブの顔を上げられた(持ち上げられた)」となりますが、実にヘブル的な表現です。

●10節の「ヨブがその友人たちのために祈った」という「祈った」という動詞は「パーラル」(פָּרַל)の強意形ヒットパエル態(再帰態)が使われています。この「パーラル」は基本形で使われることはなく、常に、強意形のピエル態か、同じく強意形のヒットパエル態で用いられます。前者のピエル態で使われる場合は、仲立ちの働きをするという意味になり、ヒットパエル態で使われる時は、とりなしをする者の主体性、自主性が強調されます。ですから、10節での「ヨブがその友人たちのために祈った」という祈りは、強い祈りではなく、あくまでもヨブ自身の主体的な祈りであったことを意味しています。それがヨブの祝福につながっていくのです。

(3) 回復された祝福の内容

●10節には後半があります。それは、ヨブがその友人たちのために祈ったとき、「【主】はヨブの繁栄を元どおりにされた。」ということです。ヨブが元どおりの祝福(繁栄)を回復されたその内容とは以下の通りです。

- (1) 二倍の所有物
- (2) 苦難のゆえに疎遠になっていた人々との交わりの回復
- (3) 七人の息子たちと三人の娘たち

【新改訳改訂第3版】ヨブ42:13~15

13 また、息子七人、娘三人を持った。14 彼はその第一の娘をエミマ、第二の娘をケツィア、第三の娘をケレン・ハブクと名づけた。15 ヨブの娘たちほど美しい女はこの国のどこにもいなかった。彼らの父は、彼女たちにも、その兄弟たちの間に相続地を与えた。・・・これは異例のことでした。

- (4) 長寿

最後に (付記として)

●私自身、26年前(1988.4~12)に、一度、ヨブ記から8回の連続説教をしたことがあります。そのときもヨブ記の難解さに閉口し、講解説教ならぬ、後悔説教で終わりました。当時は牧会カウンセリングに興味をもっていたため、そうした視点から、グリークワーク(悲嘆の仕事)の必要性、人を慰めることの難しさ、聞くことの難しさ、友情の必要性、人間の孤独の苦しみと救い、などといったテーマをヨブ記の中から取り上げて語りましたが、今回の瞑想的説教は、できるだけヘブル語の意味を確かめつつ、テキストそのものに関心を向けるように努力したつもりです。しかし、またしても不十分なもので終わった感じです。今回の瞑想的説教のタイトルを「ヨブ記から学ぶ神の牧会学」としましたが、「牧会学」ということばを一度も使うことなく(説明することもなく)終わってしまいました。またいつか、このヨブ記を真正面から取り組んでみたいと思っています。

2014.7.20